

第四話 竜馬の視線(二)

時あたかも一九八六年三月六日の未明、ここ桂浜に集まった群集の中からどつと歓声が上がりました。それは、まるで初日の出を拝んだような荘厳にして新鮮な歓声でした。桂浜の高台に立つ竜馬の銅像は、思えば一八三五年の竜馬の誕生以来、実に一五〇年振りに、天下の景勝、桂浜で、自らの名付けの元となったハレー彗星と対面を果たしたのです。

その事があって約一カ月後の四月、東京の女性から一通の手紙が届きました。

「拝啓 御免ください。先日はハレー彗星のことで色々とお世話になり有難う御座いました。名勝桂浜で竜馬とともにハレー彗星を見ることが出来た感激は一生忘れるものではありません。正に竜馬の視線の方角から正しく彗星が出現しました事は、ただ驚き以外の何者でもありませんでした。桂浜の上空に現れたハレー彗星は正に竜馬が新時代を求めて天を駆けるような勇ましく、そしてすがすがしいもので御座いました。それにしましても一つだけ質問が御座います。竜馬

はハレー彗星を見つめつつ、右の手を懐に入れていましたが、あれはなにを取り出そうとしていたので御座いませうか。もしご存知でしたらお教えくださいませ。」

この質問に対する私の答えは一風変わったものでした。

「面白いことにお気づきになりました。竜馬は懐に短筒をかくしていた、との説もありますがこの時代に刀や銃を取って戦うのはもう古いと考えていたのです。外国との交流を望み、海援隊長として海に乗り出していった竜馬は、常に南蛮から渡って来た小型の遠メガネを懐にしていました。そしてハレー彗星接近の朝、正にそれを取り出そうとしている姿こそ平和主義者としての彼の姿に相応しい光景と私は考えているのです。」と。

時は移って二〇〇三年の秋一〇月、竜馬の銅像のそばに建てられた櫓に登りました。竜馬の眼と同じ高さで見る秋の海は、あたかも彼の思想を象徴するかの如く限りなく広がっているのです。